

仏教文化公開講座講演録要旨

親鸞聖人と比叡山大乗院

浅田 正博
(恵 真)

ご紹介いただきました、龍谷大学の浅田正博です。恵真とも紹介いただきましたが、正博が戸籍名で、恵真は法名です。定年退職後は本願寺のほうでお世話になっていきますので、法名を使うようになりました、ですから正博と恵真の両方を併記するようになっております。同一人物ですのでよろしくお願いします。

さて今日は「親鸞聖人と比叡山大乗院」というタイトルを掲げましたが、これには少し経緯がありますので、そこから話を進めたいと思います。

若き日の親鸞

一カ月ほど前のことです。京都の南座の支配人から電話がありました。「来年（二〇二三）の四月に親鸞聖人の

誕生八百五十年、また立教開宗八百年の記念法要に合わせて南座で『若き日の親鸞』という公演をします」と言うのです。まだ公にはなっていないようですが、法要に合わせての公演ですから、真宗十派連合に推薦して戴くようお願いしたそうです。すると十派連合から「推薦するには監修者を付けなければなりません」ということで、二人の監修者を紹介戴いたというのです。その一人が私だと言うのです。「第一回目の打ち合わせをしたいので来てくれますか」という連絡でした。そこで『若き日の親鸞』は、どなたの原作を公演するのですか」と聞きますと、「五木寛之さんです」と言うのです。「それならば、私もいろいろ因縁がありますので、ぜひ引き受けさせていただきます」と了承した次第です。

南座公演「若き日の親鸞」を縁として

今南座では藤山寛美さんの三十三回忌記念公演会をやっているようですが、この藤山寛美さんのお孫さん、藤山直美さんの甥に当たる藤山扇治郎さんが親鸞役をするそうです。それ以外の人の配役はまだ決まっていないようですから、公表されていないようですが、「主役だけは決まっている」という話でした。

ところで私はどうして五木寛之さんと縁があったかといいますと、二〇〇八年九月一日でしたか全国の地方紙一斉に、「親鸞」と題して、一年間連載小説を書かれました。（その後、西日本新聞社より刊行）

その年の五月ごろだったと思いますが五木さんから西本願寺に電話が



写真1 若き日の親鸞
パンフレット

ありました。「『親鸞』を一年かかって連載する事になりました。」と言われ、「構想は十年前から練っていましたが、いよいよ執筆するとなりますと、どうしても比叡山へ行っておかなければ筆が走りません。誰か案内してくれる人は居ませんか」という内容だったそうです。

すると、教学研究所の所長さんから私に連絡がありまして「五木さんを一日、比叡山へ案内してくれないかな」というのです。私は五木さんと二人で比叡山を歩けると思ってたのですが、待ち合わせの京都駅へ行きますと一人ではありませんでした。たくさんのお付きの人がいました。連載前でしたのに講談社がすでに版權を持っていたようで、講談社の部長さんや課長さんがいました。しかも五木さん専用の講談社の社員までいたのは驚きでした。また、カット絵を描く画家の方もいました。加えて西本願寺の教学研究所からも、所長さんはじめ何人も付いてきました。ですから結局十数人の大所帯になってタクシーに分乗して比叡山へ行くことになったのです。「どのような場所の見学をご希望されますか」と聞きますと「あなたに任せますが、どこかで実際に修行している人の姿を見る事ができれば有り難いですね」と言われたのです。ですからほとんど私の思いで一日比叡山を巡らせていただきました。

実際、連載が始まりますと、どのように比叡山時代の親鸞聖人を描かれるのか、また、たくさんの修行の中から、五木さんはどの修行に着目して親鸞聖人を取り上げられるのか、あるいは、どのような理由で比叡山を下りられるとされるのか、現実には未解明な面を小説家ですから自由に描ける訳ですので、五木親鸞として大変な関心をもって連載を読んでいたのでした。

その年の十二月の終わり頃でした。出稿前に目を通して欲しいと言う原稿が届いたのです。そこには比叡山で親鸞聖人が好相行をなされたという設定で書き進められていたのです。私はすぐに「親鸞聖人は好相行をなされたと

は思えませんが…」と連絡しました。ところがすでに正月休みに入っていましたので「残念ですが、時間的に書き換えることはできません」との秘書からの返事だったのです。

好相行

ここで好相行の話をしましょう。現在、比叡山では、十二年籠山行の入門テストのような形で好相行が修されています。十二年籠山行は十二年間比叡山を下りずに山に籠もりつきりでの修行です。それにはよほどの堅固な道心が必要です。その信念を養うためにされる行だと聞いておりますが、經典上では「自誓受戒」に相当するものです。好相とは、仏様のお姿のことで、三十二相八十種好を言います。三十二相の「相」と、八十種好の「好」から「好相行」と呼んでいます。

また自誓受戒とは大乘仏教独自の受戒の仕方です、直接お釈迦様から戒律を授けていただくことを言います。直接お釈迦様からの受戒と聞きますと、私たち凡人からは少し奇異に感じます。通常、目前に戒師がいて、その戒師から授けていただくのが戒律の受け方と思えますが自誓受戒はそうではありません。お釈迦様から授けられるのです。その為にはお釈迦様の相すがたを受戒する行者の目で実際に見なければなりません。いわゆる見仏体験することが好相行ということになります。ですから好相（仏の姿）を感得する行という意味から来る呼称です。

このような体験をしたことが無い私が、この話が出るのには理由があります。龍谷大学の大学院博士課程を終わった年の事です。叡山学院学監の小寺文顕先生から「叡山学院で教鞭を執らないか」と声をかけて戴きました。以来、週に一日でしたが十年間叡山学院へ通わせて戴きました。学者の知人も当然ながら増えましたが、修行を体

験された沢山の行者さんと知り合いになれたのが何よりもありがたかったです。

自らの修行によって至った境地はなかなか他人には話しません。ところが、私が教えた学生が卒業して比叡山へ入って修行をしますとしたものです。少々無理にでも体験談をきかせてもらえます。例えば千日回峰行の体験者ですが、十年間に教えた学生の中から三人も出ています。私は真宗ですが天台宗との宗派の壁は案外高いのがあります。しかし教え子となるとこの壁を取っ払ってくれます。いろいろな裏話も聞かせてもらったり、自力聖道門を体験した境地の深まりを知らされたりで、その後の私の研究に大いに役立ちました。そういう中の一つが好相行です。

浄土院 比叡山三地獄行の一つ「掃除地獄」

比叡山は、東塔、西塔、横川の三つのエリアがあります。東塔から西塔に至るちょうど中間辺りに、浄土院と言う、伝教大師最澄の御廟所があります。今日、好相行を修する場所がこの浄土院の拝堂です。「礼拝」の「拝」と「お堂」の「堂」を書きます。お墓の前にある礼拝堂という意味です。皆さんは西本願寺の大谷本廟をご存じでしょうかそれ为例に説明しますと、親鸞聖人の御廟所の前に明著堂と言うお堂があります。普段は荘厳具が一切なくて、しとみ戸が上がつている能舞台のようなお堂です。これが拝堂です。法要時には礼盤を置いてお勤めがなされます。比叡山の浄土院はしとみ戸が下りていますから、堂内を伺うことが出来ませんが荘厳



写真2 浄土院

具だけを安置してある礼拝の為の建物です。この拝堂の裏へ回りますと最澄さんの御廟所の前に出ます。

今日ご存命で好相行をされた一番年配の人が堀澤祖門と言われる方です。二、三週間ほど前、京都新聞を賑わせました。この方が天台宗の一番上の階級の探題に就かれました。その記事が新聞の第一面にカラー写真入りで出ました。

今年で九十三歳だそうです。この探題の中から天台座主が選ばれるのですから、堀澤和尚さんに、「もうぼつぼつですね」と言いますと「いや、私より年上の探題さんが三人も居るよ」と聞かされました。皆さんすごく高齢な方ばかりですね。

西本願寺に宗学院という教育機関がありますが、そこにお越し頂いて好相行の体験談を話していただいた事がありました。その時、堀澤和尚は大原三千院の門主さんでした。あのようなご門主が来られますと、西本願寺も丁重にお迎えをしますね。本願寺職員の方が飛雲閣を案内し、しかも二階から三階まですべて拝観を許してくれるのです。私は飛雲閣の一階には入った事がありますが、二階以上の拝観を許されたことがありません。ところが、「天台宗の門跡寺院である三千院の御門主です」と言えば「二階へどうぞ」と言われ驚きました。下の写真が飛雲閣の二階の窓から滴翠園を眺めておられる堀澤先生です。ところで、この宗学院の前にも龍谷大学へ講演にお招きした事がありました。その折に堀澤先生に好相行の実際というタイトルで話して頂いた記録が、この『天台』に収録されています。私は、ちょうど十年ほど前に龍谷大学の教授を定年になりましたが、その定年直前に、天台関係で知り合いになった学者



写真3 飛雲閣二階の堀澤師

や行者さんを龍谷大学へ招いて、ちょうど一年間にわたって月に一度、講演会を開催しました。合わせて十二人に来学頂きました講演録がこの本なのです。一度皆さんも手に取って見て頂きたいと思います。そのオープンセレモニーにお招きしたお方が堀澤祖門師だったので。

好相行の実際

堀澤先生のタイトルは「好相行の実際」と言うものでした。先に述べたように浄土院の拝堂内部の一角を白い幕で囲い、正面に「受戒の三聖」という、お釈迦様と弥勒菩薩と文殊菩薩の絵像を掛けて、その前で礼拝行を修めます。真宗では五体投地の礼拝を行いませんが、頭と両肘と両膝を大地に付けて、両手を上に向けて耳の所まで挙げます。すると、今、お称えした仏様が、手のひらの上に立たれるというのです。いわば一番敬虔な礼拝の仕方が五体投地という事になります。

テレビでチベット仏教などの五体投地を放映しているのを見ますと、合掌した両手を伸ばして地に伏し、全身寝ているように見えますが、日本の五体投地は膝と肘を曲げて地に伏し、お尻を上げたまま蹲っている状態での礼拝です。

下の写真に「三千佛名経」と言う經典名が石に彫られてありますが、過去に千仏、現在に千仏、未来に千仏の合計三千の仏さまが居られるわけですが、こ



写真5 三千仏名経の碑



写真4 天台講演録
(自照社出版)

の総ての仏様の名前が記載された経典をいいます。この三千仏名経に記載された仏様一人一人の名前を一日に一回称えて、その一仏に対してそれぞれ五体投地の礼拝をするのです。一日に一回と簡単に言いますが、三千仏ですから一日に三千回の礼拝を繰り返さねばならないことになります。ですからこの行を「礼拝行」とも呼んでいるのです。

その経典を経机に置いて、一人一人の仏様の名前を称えます。例えば、阿弥陀様ならば「南無阿弥陀仏」ですね。この名号を称えると同時に五体投地を行います。その間に、まず「磬」を一音鳴らします。「磬」は真宗では使いませんが「リン」と同様に使用します。「磬」は上からトンとたたくと音のする鳴らし物です。

そして焼香をし、散華をします。散華は本来、花びらを散ずるのですが、たくさん花びらを用意することができませんので檜の葉を撒いています。ですから、この行に入った行者がいるとなると、比叡山全山の檜の葉が集められます。

少し考えてもらいたいのですが、単純に計算して、もし一仏の礼拝に一分かかるとしますと一時間で六〇仏、二十四時間ならば一四四〇仏です。これならば到底無理です。一仏に三十秒だとしても二八八〇仏ですから一日に三千仏は礼拝できないこととなります。もちろん、寝ることは許されませんが、疲れ果ててしまえば寝ざるを得ません。ところが、横になることはできません。「縄床」と言う麻縄で編んだ椅子がありますが、それがお堂の隅に置いてあるそうです。その椅子に座って、少しうとうととするぐらいは出来るようです。それでも、やはり、食事しなければなりませんし、トイレにも行かねばなりません。それなどを考えれば、大体十五秒か二十秒ぐらいで一仏を礼拝しなければ、明るる日に練り越さねばなりませんから大変です。

この行は比叡山で十二年に一度程度行われます。なぜならば先ほど「籠山行」の話をしました。籠山とは「山

にこもる」と書きます。俗界を離れて比叡山に籠もる修行です。この行は開山の伝教大師が『山家学生式』に規定しております。十二年と決めて籠山し修行します。これを籠山比丘と呼びます。この籠山比丘になるための自誓受戒でもあるのです。ですから十二年に一度程度ですから、好相行の場に出合うことがなかなか出来ません。

すでに二十年ほども前になりますが「好相行に入られた」と聞きましたので、正確な時間が計れる時計を持って浄土院を訪れました。お堂の中に入ることはできませんが、行を修している拜堂の外側へは行くことができます。扉一つ隔てた向こうで好相行をしているのですから声が聞こえます。声が聞こえれば一仏を何秒で礼拝しているかが分かります。そのときは非常に弱々しい声でして、外には聞こえませんでした。ただ磬を打つ音が響いてきます。トーンからトーンまでで一仏礼拝するのですから、その時間を測ってみれば四十秒もかかっていたのです。よほど疲れておられるんだと感じた次第です。

仏名を唱えながら***

堂内の写真を撮ることが出来ませんが堀澤祖門先生が自らの修行中の秘蔵写真を『天台』に提供して下さいました。

下の写真を見てください。合唱している手ですが、注目してもらいたいのは指の「たこ」です。五体投地をして礼拝しますから、指が床につくのです。するとこのような「たこ」が指に出来るのです。これは写真を見せて頂かなければ解りませんね。



写真6 好相行中の掌のたこ

ところで堀澤先生に「どれぐらいの日数で仏様を拜まれたのですか」と尋ねたことがあります。そうすると「三カ月程度です」と応えられました。九十日ですね。經典には修行の期間が様々に定められています。例えば一週間や一ヶ月、あるいは三カ月です。春秋の彼岸会は今日でも一週間修されていきます。ですからそのまん中の日を「彼岸の中日」と呼ぶのです。春分の日や秋分の日です。また「常行三昧」などは三カ月と規定されています。大体同じ修行を九十日ほどすれば、仏様を感得するなり、あるいは一験を得るような宗教体験が出来るようになります。

私たちにとっての一番の関心事は「見仏体験」です。堀澤祖門先生に「仏様を見られた様子」を尋ねたことがあります。私は「仏を見た」と表現しましたが、これは誤りだそうです。「好相を得る」と表現するのが正しいようです。なぜならば肉体的な目で仏を見るのでは無いからです。この宗教体験は目を開いていても目を閉じていても仏を認めることが出来るからだそうです。

『天台』の講演内容の文章は堀澤先生に確認して頂いて載せています。しかも講演して頂いた通りですので、この体験談の箇所を読んでみましょう。

私の前方四メートルほどの所、そして、二メートルほどの高さに一メートル弱の仏様が立っておられるのです。ちょうど極彩色の掛け軸の中から抜け出てきたようなお姿で、まじろぎもせず、じっと私を見つめておられます。仏様の表情や細やかな動きまではつきりと見て取れるのです。その仏様から見つめられたとき、私は瞬時にお釈迦様だと直感しました。すると、同時に、『南無釈迦牟尼仏』という言葉が腹の底から突き上げるように、止めどもなく湧き出てくるのです。

…

私は夢中になって合掌したまま、『南無釈迦牟尼仏』と唱え続けました。全身が硬直状態となって、感動の

渦の中にあり、涙と汗が混じり合って顔の上を流れるのが分かりました。どれぐらいの時間が経過したのか。やがてお釈迦様の右手からひも状のものが一本伸びてきて、私の腰の周りを巻きます。そして、さらに、そのひもがお釈迦様の手元へ戻っていきます。お釈迦様はそのひもを両手に取られて、じっと私を凝視したまま、静かに後方へバックなされました。そのとき、私の腰がぐつと引き上げられる感じがして、やがてひもはするすると抜けていきました。

大変具体的に、「このようにして私は仏様を拜しました」という話をしていただいて、聞いている皆は感激でした。龍谷大学の大宮学舎の本館講堂は百五十人ほど入りますが、二百人以上の学生であふれていました。

今日、私は大学の授業を担当して感じるのは、先生としての威厳が無くなったと言うことです。私たちの学生の頃は、先生に質問するときは改まった思いで問いかけたものです。しかも敬語を使っています。しかし今の学生たちは先生を友達のように思っているようです。話しかけも敬語ではありません。「先生、仏さんってほんとに居んの？」このような調子です。「仏さんがほんとに居るんやったら、ここへ出してよ！」というような問いかけは日常茶飯事です。疑問点を素直に先生に聞くことは良いのですが、もう少し聞き方が無いかないと感じます。しかし質問の仕方は別にしても、よく考えますと、私たちが若いときも同じような思いだったなと感じます。見ることもできない、触ることもできない、声を聞くこともできない、そのような仏様がおられると聞いても納得できないというのが、仏教を学び始めた最初の思いですね。そのときに「どうしても仏さんを確認したいのなら、比叡山へ行って好相行をやってみれば良いよ！」と学生に言います。すると学生たちはキョトンとしています。

そこで思いついたのですが、西本願寺派で得度を受ける人、要するにこれからお坊さんになろうと志を抱いた人に対して、西山別院で十日間、得度習礼と言う僧侶の実習が義務づけられています。その頭初に、好相行を修した

行者さんの体験談を聞かせてもらえば、僧侶人生に大きな影響を与えられるのでは無いかと考えたのです。十日間の習礼の第一日目は受け付けですから、二日目にバスで習礼生全員を比叡山へ連れて行って、「仏様は本当におられるんだよ。私はその仏様の姿を見たんだよ」という体験談を聞かせてもらうようにしたのです。数年前から始めたのですが体験談を聞くことはなかなか好評のようです。

少し話がそれましたが、好相を得た体験談に戻りましょう。私たちはこのような話を聞いて、すぐにそれを信じる事が出来るでしょうか。極端な言い方をすれば「行者さんが勝手に仏を見たと思っっているのでは無いの？」と考えないでしょうか。誠に愚かなことと言わざるを得ませんが私たちはそこまで疑いの心を持っているのですね。

ここに、私は比叡山ならではの大きな伝統があると思うのです。それは何かと言いますと、行者が見た仏が本当の仏か、あるいは仏とは違うものを認識したのか。あるいは夢・幻を見たのか、等を判定される師匠がおられるという事です。師匠とはすでに好相行を実体験された方です。その師匠は同じようにその前の師匠に認定して頂いたのですから、比叡山には歴代に渡って途切れることなく好相を得た体験者が居られることになります。これこそが比叡山の素晴らしい伝統と呼べるものでしょう。ただここで「仏とは違うもの」といいましたが、これについて少し説明しておきましょう。經典には「悪魔が来たりて仏の姿を現ずる」という表現もあります。悪魔が仏様の姿になって現れるという意味でしょう。形や姿は仏さまでしょうが。これでは仏を拝したとは言えないでしょう。そのような場合もあるそうです。

そこで、すでに体験された師匠、これを「明師」と書いてありますが、その明師に体験した状況を確認して頂く必要があるわけです。堀澤先生は不思議な体験をすれば必ず、たとえ夜中であっても師匠の所へ報告に行かねばならないと厳命されておられたようです。堀澤先生の続く法話に耳を傾けましょう。

やがて、これが好相だったのだと自知するようになり、身動きも徐々にできるようになりました。何かの体験があったときは、時間を問わず、師僧を訪ねることになっていましたので、私はそのまま師僧の元を訪れました。師僧は直ちに起き上がって、私の報告を子細に聞いてくださり、幾つかの点を確認されました。そのうえで、『それでよろしい。確かに好相です』と断定してくださいました。

とあります。これが先ほどからいう比叡山の伝統だと思えます。これが仏々相念というのでしょうか、同じ体験をしたのだけが分かり合える世界があるのでしょうか。ですから単に「私は仏様を見た。」と、個人的にいくら主張してもそれは通じないのです。駄目です。明師が認めなければ好相では無いのです。

愚問だと分かっているのですが、つい聞きたくなってしまう様々に尋ねてみました。「いつたいどのような状況ならば好相であって、どのような状況ならば好相でないのですか？」すると幾つか教えてくれました。

「当然ながら、細かいところは体験しなければならぬのだけれども」と言いながら、一つは、目を開いていても仏様が見えるし、目を閉じていても仏様が見えるということです。「目を閉じていても仏が見える」というところ

に肉体的認識でないことが分かります。ですから「仏を見る」と言わずに「好相を得る」というのです。例えば『観無量寿経』に日没時における「日想観」が説かれてありますが、そこに

有目の徒、みな日没を見よ。まさに想念を起し、正坐し西向し、あきらかに日を観じ、心をして堅住ならしめ、専想して移らざれば、日の没せんと欲して、状、鼓を懸けたるがごとくなるを見るべし。すでに日を見ること已らば、閉目開目に、みな明了ならしめよ。これを日想とし、名づけて初めの観といふ。

とあります。「閉目・開目しても、太陽がはっきりと分かる」というのです。どうも同じような境涯をいうのだと感じました。

次に第二の見分け方です。堀澤先生は次のようにも話してくださいました。認識した仏様が絵に描いてあるように動かないお方ではなく、動きが伴った仏様でなければならぬ、のだそうです。

第三には「声が澄んで来て、遠方まで届く」とも聞きました。

私はあの比叡山の中で、五百メートルあまり離れた所から、朗々とした念仏の声を聞いたことがあります。あるいは、先ほども話しました通り好相行を修している場所は浄土院ですが、この門前は行者道でもあります。毎日々々回峰行者が通ります。すると三千仏を称える声が聞こえるのです。回峰行者がその声の澄んでいく具合を聴いていて、好相を得られるのもそろそろだと感じるとも聞きました。あるいはまた經典の中に仏様の説法のことを獅子吼ししこうと説かれてあります。獅子とはライオンで、ライオンが吠えるのを獅子吼と呼びます。悟りを得た方の声には拡声器などには必要ないという感じがしますね。

五木さんが書いた『親鸞』は、聖人は好相行を行いながらも仏を見ることが出来なかったのです。ところが、聖人の苦しむ表情を知った周辺の人々が「仏を見た」ということにしたのです。本人が仏を見たと言わないのですが、いつの間にか好相を得たことになっていたのです。これは、仏を見るか見ないかは本人で無ければ分からないという判断から、それだけ修行すれば十分だよというような思いがあつて周辺の人が気を遣つたところから出たのだと思います。ところがご本人は納得できるものではありませんので、その矛盾から比叡山を下りる決心ができたという筋書きになっています。小説としては大変興味深い所ですが、実際にはそういうことは無いと思います。

なぜ「ない」と言えるか、そこが問題です。堀澤祖門先生の弟子に宮本祖豊と言う行者がいます。宮本祖豊さんが修した好相行は壮絶なものだったのです。本人が、好相行を終え、しかもその後の十二年もの籠山行を終了した直後の二〇〇九年（平成二十一年）でしたが「比叡山時報」記者の坂本さかもとさんがその壮絶な好相行の様子を紹介し

た記事が「大法輪」という仏教月刊誌に出たのです。天台宗の「比叡山時報」は真宗の「本願寺新報」に類した新聞です。その記者が宮本行者さんに代わって修行を紹介したことになります。「大法輪」も今日では廃刊になってしまつて寂しい限りですね。

その記事を見ますと宮本祖豊さんは九十日程度では仏様を拝することが出来ませんでした。そればかりか百日たつても二百日たつても拝めませんでした。今日までは大体九十日が平均的だとは既に述べたとおりですが三百日たつても拝めません。心配して、「もう、見たということにしようか」との話まで噂されたと聞きました。丁度、五木親鸞と同じパターンです。しかし、もしここで、実際に好相を得る体験をしないのに、好相を得たことにすれば、そこで伝統は途切れてしまいます。要するに、そのあと、他の行者が同じ修行をしたとしても体験が無いのですから実質的に指導が出来ません。ところが、周囲の人が認めているから、師僧（指導僧）にならざるを得ません。大変な矛盾に陥ってしまいます。「ですから絶対に駄目」ということで、何が何でも仏を見るまでやることになったそうです。

すると、足かけですが五七五日かかってやっと好相を体験されたそうです。ただ坂本記者は五七五日と書いていますが、その後、宮本さん御本人に確認しますと五八五日と言っておられました。それほど混乱した状況だったのでしょうか。今ここではご本人のいう五八五日で計算しますと、休み無くぶっ続けたとしても二年弱かかりますが、到底身体がもつものではありません。これ以上すれば死んでしまうというギリギリのところまで来ればドクターストップがかります。宮本さんは二度までドクターストップがかかったと言います。

今、「大法輪」の記事や、その後に着述された宮本さんご自身の書『覚悟の力』を参考にして五七五日間もしく



写真7 平成21年12月号
大法輪

は五八五日間をたどってみましょう。

その第一回目の行。これは、一九九四年六月から一九九五年五月までで三百日を越えたそうです。仏様の姿が見えませんが、ここを宮本さんは

私の場合五ヶ月続けても六カ月続けても仏様は見えませんでした。季節は真冬となり、素足で氷のように冷たい板の間に立っていると十本の足の指すべて割れました。ついには踵や土踏まずまで割れて血がにじみ出し、更に化膿してきました。：お堂の気温は連日マイナス十度にまで下がり、体は冷え切っていました。と述懐しておられます。また

師僧は私の目が見えなくなった頃に何度も様子を見に訪れました。そして私に向かって「死になさい。死になさい」といいました。頑張れと励ましたところで頑張りようが無いので、逆にそういう言葉をかけてくれたのです

「死になさい」という言葉が逆に励ましであったというのです。すざましい世界ですね。あるいは、

実をいえば、自分自身でももう止めようかと思ったことがあります。しかしそう口にするのと先達の方達も心配してくれて「止めてどうするんだ。止めたら坊さんは終わりだぞ。それとも死ぬのか、どっちだ」と叱咤されました。そう聞かれると「死にます」とはなかなかいえません。

死が目前に迫っているのがわかります。それでドクターストップがかかったのです。

二度目の行です。一九九六年三月から同年十二月までで、この時の様子を坂本さんの文章を読みましよう。

声はつぶれ、筋肉が落ちて頭がたれ、冬場には上半身の感覚がなくなって、砂糖の甘さを感じることができ

なくなつた。さらに、幻覚、幻聴、幻臭が現れた。

というのです。幻覚とか幻聴は時々聞きますが、幻臭までが現れたというのです。

当時を知る僧侶は、「表情は死人、氣迫迫るものがあつた」と証言する。
と坂本さんは述べます。

一方、宮本さんは

師僧がときどき会いに来てくださいました。「蟬人形のような姿だな」と声を掛けてくださったのを覚えて
います。私は何も反応出来ませんでした。その頃は光が当たっても反応せず、顔の表情もないという様子で、
瞳孔もほとんど開いた状態になっていました。

と述懐しておられます。こうして二回目のドクターストップがかかったのです。

三度目の行に入りました。これが一九九七年一月から二月までで、いよいよ好相が現れるときが来たといひます。

礼拝それ自体に喜びを感じ、「いい声、いい状態」

と、関係者が言つたそうです。

いい声、いい状態の中で仏名を唱えて、ついに仏の姿を目の当たりにした。そのときには、自分の中に空と
大地が一遍に溶け込んで、自分と地球が一体になる感じでした。

この様子をご本人は

「仏様を見た一瞬はもちろん喜びの状態にありました。しかし実を言うと三度目の行に入って間もなく、私は
すでに異次元の世界にいるような感じでした。お堂の外はダイヤモンドのようにキラキラと輝き、礼拝して
いる間は常に体中が喜びに溢れ、自分の声が天地に鼓動して、その振動に木も石も大地もすべてが喜んでい

るかのようでした。

と感動を語っておられます。

私の前に立ち現れたのは阿弥陀様でした。

行者さんによって感得される仏様が異なるようです。ですから宮本さんは阿弥陀如来の好相を得られたということでしょう。

堀澤先生のように見仏時の具体的な情況は語られませんが「自分の中に空と大地が一遍に溶け込んで、自分と地球が一体になる感じがした」という体験からして、単に仏を見るのでは無く大いなる喜ばしい感激が湧き起こってくるようです。

ところで五木親鸞に戻ってみましょう。五木さんは、見仏を聖人ご自身が体験しないものを、師匠や周辺の僧侶が認めた、として小説を展開しておられます。その矛盾や葛藤の苦悩が比叡山を下りる決心をさせたというのです。「小説は、点と点を結ぶ線だ」とある人が言いました。これは非常に意味深長だと思います。親鸞聖人が九つのときに、青蓮院で慈鎮和尚の下で得度しました。これは一つの点です。そして二十九歳のときに、山を下りて六角堂に参籠しました。これも一つの点です。この間の事績は歴史上欠けています。この点と点を線にしていかに結ぶか。そこに小説家の發揮点があります。小説家ですから、いわば自由に書けます。自らの思いを、色々な登場人物を創出して表現できます。しかし、私たち研究者はそのような訳にはいきません。小説家ではありませぬので、根拠が必要になって来ます。

恵信尼消息における堂僧

皆さんが一番ご存じなのは「堂僧」だと思います。大正十年に鷲尾教導先生が西本願寺の蔵の中から「恵信尼文書」を発見されました。今日ではお手紙と言うことで『恵信尼消息』と呼んでいます。そこには「袖書き」として、手紙のホンの端の方に

殿の比叡の山にて堂僧つとめておわしましけるに

という一文があります。もちろん鎌倉時代の女性の手紙ですから総てが仮名です。漢字をあてはめると多分このような漢字が配当できるかと思います。「との」とは奥方が主人を呼ぶ言葉ですから聖人を指します。親鸞聖人は比叡山での行跡を一切どこにも語っておられません。そのような中で、聖人は比叡山で「だうそう」を努めておられたという文面ですから、当時は貴重な発見として騒がれたようです。ただ比叡山ではこの堂僧の立場がよく分かりませんでした。大僧正という僧階でもありませんし、時代によってもバラバラに使用されたようですから聖人当時はどうであったのか、多くの学者が研究しました。そして今日では「常行三昧堂」に出仕する僧であつたらうという結論に至っています。

天台宗の根本論疏に天台三大部がありますが、その一つに『摩訶止観』と言う実践書があります。これによりますと九十日の間休み無く、阿弥陀様の周りを、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と唱えながら、しかも心に阿弥陀仏を念じながら歩き回るといふ修行方法が説かれています。これが常行三昧です。

九十日、身は常に行じて休息なく。九十日、口は常に阿弥陀佛名を唱えて休息なく。九十日、心は常に阿弥陀佛を念じて休息なし。

です。これらを総して

歩々声々念々ただ阿弥陀佛にあり

とあります。身は阿弥陀如来の周りを休み無く歩き、口は南無阿弥陀仏と称え、意では常に阿弥陀如来を念じるという身口意の三業にわたって阿弥陀如来になりきるのです。そうしてこの行の三昧境に達しますと、やはり「見仏」、「阿弥陀仏を見る」事が出来ると述べられています。ですから別名「仏立三昧」とも言うのです。仏が立たれる三昧です。

よく定中において十方の現在の仏、その前に在して、立ちたもうを見たてまつること、明眼の人の清夜に星を見るがごとく、十方の仏を見ること、また、かくのごとくに多し、故に仏立三昧と名付く。…

とあったり、また

仏を見んと欲すれば、すなわち仏を見る。見ればすなわち問い、問えば

すなわち報^{こた}う

というのです。ただこの「こたう」という漢字は「報」という字で表していません。ですから、実際に目で見えるのではなく、見仏と言いながらも心で感じる応え方ではないかと思えます。

この常行三昧を修する常行三昧堂は、親鸞聖人当時、東塔・西塔・横川の三箇所にあったようです。ただご承知のように織田信長の叡山焼き討ちによって総て消失しましたので、今日復興されているのが西塔のお堂だけです。ですから比叡山の西塔にてその全貌を知ることが出来ます。一般に言う「担い堂」で



写真8 西塔の中堂（釈迦堂）

す。同じ形式のお堂が二つ建っていて一つの回廊で結ばれているのです。その向かって左側のお堂が常行三昧堂です。聖人の御伝鈔には叡山修行の様子を「横川の余流をたたえて」という記述があります。そこから「たぶん横川の常行三昧堂であろう」などと言われますが、詳細は分かりません。

親鸞聖人ご修行の常行三昧堂

左下の担い堂の写真を見てください。私が学生を案内したときのものですが、弁慶がこの回廊を担ったという意味が分かるでしょう。右と左に同じ大きさのお堂があります。右側のお堂が法華三昧堂です。左が常行三昧堂です。図面でみれば堂内の構造も左右全く同じです。しかも両堂を廊下で結んでいます。「朝題目に夕念仏」という山の特色を語った言葉があります。朝に法華堂で、「南無妙法蓮華経、南無妙法蓮華経」と唱えるのです。そして同じお坊さんが、夕方にはこの回廊を渡って、左側の常行堂で、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と唱えるのです。ここから、「朝題目に夕念仏」という言葉が出ました。

この両堂は一般公開されていません。純粹に修行道場だからです。ただ特別にお願いを



写真9 がない堂の渡り廊下



写真10 学生を案内したときの常行三昧堂

すれば拝観は許されます。前頁の二枚の写真は行信教校の学生を案内したときのものです。

下右は御本尊の阿弥陀如来です。ただよく見て戴きますと孔雀の台座に座しておられます。ですからこの阿弥陀様は密教の阿弥陀様です。それはこのお堂を最初に建立した慈覚大師円仁の考え方によるようです。

左は私が案内したときの写真ですが、常行三昧堂内に津本陽と言う小説家の先生が座っています。津本陽さんも、五木さんが「親鸞」を出版したとほぼ同じ頃に『無量の光：親鸞聖人の生涯：』（津本陽著・文藝春秋）というタイトルで、聖人の生涯を小説にしてくれました。その執筆時に「比叡山へ連れていってください」と言われたものですから、案内した時のものです。

常行三昧という修行は九十日間、夜も寝ずにとにかく無限に歩き通します。次頁右の写真を見てください。廊下用の外陣に相当するエリアですが、写真ではわかりませんが、真ん中だけがびかっと光っています。そこを歩いているのです。ただ疲労困憊すれば廊下の真ん中を歩くことが出来ません。何かに掴まらなければなりません。柱と柱の間、丁度胸のあたりに相当する高さに青竹が渡してあるでしょう。一人で歩けなくなればこの竹を伝って歩くのです。そして眠くって仕方なくなれば、この竹を胸に挟むようにして両腕を垂らして寝ると聞きました。当然ながらぐっすり寝ることが出来ません。ウ



写真12 一番奥に座っておられる方が
津本陽さん



写真11 御本尊の阿弥陀仏

トウトつとすれば竹から胸が離れて床に叩きつけられます。そうしますと目が開きます。目が明けばまた合掌して歩くのです。まさに「九十日、身は常に行じて休息なく。」ですね。このような修行が常行三昧です。そこに出仕する僧を堂僧と呼んだのですね。

無動寺谷大乗院に伝わる親鸞聖人の伝説

いよいよ中心の話に入りましょう。親鸞聖人が比叡山で他にどのような修行をされたかを考えたいと思います。二十年間も居られたのですから色々な修行をされたと思われれます。その証拠に、

いずれの行もおよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし

という『歎異抄』のご文があります。「いずれの行」ですから、さまざまな行ということですが、それを考えるに当たっての一つの方法として、比叡山に伝わる聖人の伝説を探ればどうかと考えたのです。

今日でも親鸞聖人の伝説が比叡山に伝えられています。

下の比叡山の三塔の鳥瞰図を見てください。東塔、西塔、横川という三つのエリアがあります。この三塔中に堂舎が沢山建っています。これらのお堂はばらばらに建っているわけではありません。ある程度集中して建っています。そのお堂の集まりを「谷」と呼んでいます。十六ありますので「十六谷」です。



写真14 比叡山鳥瞰図



写真13 堂内の下陣に相当する通路

そこに堂舎が三千坊あったと伝えられています。これは少し大げさだと思えますが一般に比叡山は「三塔十六谷三千坊」と呼ばれます。天台教義で「一念三千」と言う言葉があります。「全て」という意味で「三千」という用語を使いますので、全てのお堂を「三千」と表現したのではないかと思います。

ところでこの十六谷の一番南の谷が東塔のエリアにある無動寺谷です。この無動寺谷は、今日でも自動車が行き通じません。自動車用道路がないのです。昔ながらに歩行できる道のみです。やはり修行の聖地だからでしょう。比叡山そのものが聖地でしょうが、中でもその根拠地という意味で車を通さないのだと思います。

親鸞聖人御修行の旧跡

下の写真は無動寺谷の中の大乘院という一つの坊舎です。入り口に「親鸞聖人御修行の旧跡」との碑が建っています。歩いて行かねばなりませんのでここまでお参りされる方は少ないと思います。まだお参りされていない方は、ぜひ行ってください。但し歩いてです。叡山ケーブル山上駅からですと、行きは下りになりますので十五分ほどです。ところが、帰りは上り坂ですから少し大変です。休みなく歩いて三十分程度でしょうか。先年の七五〇回大遠忌法要のときに、ヨーロッパからお念仏者が四十名ほど日本へお参りに来られました。その方々が、「せっかく日本へ来たのだから、親鸞聖人関係の旧跡を回って帰りたい。中でも無動寺谷には是非とも行きたい」として、私に案内を乞うてこ



写真15 大乘院全景

れた事があります。日本人でも知る人が少ない場所ですのにと感心したことがあります。

大乗院は親鸞聖人がご本尊

なぜ皆さんにこの地を訪れてくださいとお願いするかと言いますと、この大乗院は親鸞聖人がご本尊なのです。私も最初にここへお参りして驚きました。まさかと思いました。向かって左側の余間に阿弥陀様がお祀りしてあります。右の余間は師匠でしかも天台座主を五度まで勤められた慈鎮和尚です。通常のお堂ですとご本尊が阿弥陀如来でなければなりません。それなのに親鸞聖人が正面の御本尊です。比叡山は天台宗の本山です。その本山の一つの境内に、他宗派の御開山をお祀りした坊舎が大乗院ということになります。今日の宗派感覚からすれば考えられない荘厳形式です。

例えて言うならば「西本願寺の境内に、天台宗の開祖の伝教大師を祀る祠を建てて、真宗のお坊さんが毎日毎日お給仕をするようなもの」ということになるでしょう。

下は、ごく最近の内陣の写真です。御本尊の前に不動明王が安置されています。私はこの不動明王を見て、天台宗のお坊さんの葛藤じゃないかと思えました。やはり、他宗派の親鸞聖人に毎日毎日お給仕するわけですから、どうして自分は親鸞聖人にお給仕するのだろうかという思いに駆られるのではないのでしょうか。ですから、その前に不動明王を置いて、不動明王と親鸞聖人

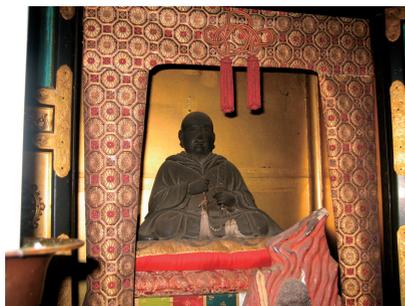


写真16 大乗院内陣最近の写真
前に不動明王の迦楼羅炎の光背が見える。

と共にお給仕させていただくという感覚を生じさせているのだと思います。私の学生の頃は不動明王は安置されておられませんでした。

さて御本尊を見て下さい。襟巻きをされた親鸞聖人のお姿です。一見して親鸞聖人のお姿だと分かるでしょう。どうしてこの大乘院が聖人を御本尊とするかといいますと、この御本尊に関して「そば喰いの木像」と言う伝説があるからです。

四十九歳という若さで亡くなられたのですが、叡山学院の学監をされていた小寺文顕という先生がおいででした。龍谷大学の私の先輩の先生です。勿論天台宗のこの叡山一山のお坊さんでした。小寺文顕先生は小学生の頃から、この大乘院に預けられて育った方です。龍谷大学へはこの大乘院から通って来られたのです。ですから、いわば大乘院生え抜きのお方です。その先生から「そば喰いの木像」に関してお寺に伝わっている伝承がある」として聞かせてもらった事がありました。

それは、親鸞聖人が六角堂に百日間参籠されていた頃の話です。その頃の参籠には二種類あって、お堂にこもり続ける「籠りの参籠」と、毎日お堂の外から通い続ける「通いの参籠」とがあったようです。ここに伝わる聖人の参籠は後者で、毎日々々この大乘院から六角堂へと通い続けられたというのです。当然ながら、昼は他の小僧さんと同じように大乘院での修行をします。皆が寝静まってから、こっそり大乘院を抜け出して六角堂にお参りをするのです。そして、同僚が目を覚ますまでに大乘院に帰ってくるのです。そのような参籠生活を百日間なされていたきの出来事です。

百日間もそのように夜中に抜け出すのですから、同僚の知るところとなります。そこで、同僚が勝手にうわさを立てます。うわさですから、いいうわさではありません。「親鸞聖人は、夜中に抜け出して京都へ遊びに行っている」

というのです。遊ぶだけならばまだいいのですが、女性のもとに通っているといううわさまでが立ったというのです。そこで、師匠の慈鎮和尚が、事実かどうか、まず事の真偽をはっきりさせねばならないということで、考えついたのが小僧さんの数だけ蕎麦を用意したというのです。そこで聖人が出払った夜中に、「信者さんから蕎麦を頂いたので、夜中だけいただきますい」と言つて、小僧全員に非常招集をかけたのです。親鸞聖人が居なければ、蕎麦が一つ余るといふ設定でしょう。ところが、居ないはずの聖人がそこで蕎麦を食べていたというのです。その姿を見て同僚の皆が、「単なるうわさだった」と納得したといひます。そのような出来事を知らずに、明るる朝、聖人が六角堂から大乗院に帰ってきます。そして、いつもお参りしている、聖人自ら彫られたと伝えられる「鈍彫たぬぼりの阿弥陀様」の前に行つて、「今日も無事にお参りをさせていただきます」と挨拶されると、何と阿弥陀様の口元に蕎麦がついていたというのです。要するに昨夜の蕎麦のふるまいを阿弥陀様が聖人に姿を変えてお食べになつたというのです。その蕎麦を食べられた聖人のお姿をご本尊としたものですから、これを「蕎麦喰いのお木像」と呼んでいゝるというのです。

下の写真が鈍彫りの阿弥陀如来です。胸のあたりが焦げています。このような伝説がいつ頃まで遡れるのだろうかとの興味本位で、この阿弥陀如来の調査をお願いしたことがあります。十数年前になるでしょうか、本山前の地に龍大が龍谷ミュージアムという博物館を造りました。その学芸員の人に調べに行つてもらつたのです。すると、「このお像はかなり古いのですよ。胸のあたりの焼け跡は多分、織田信長の焼き打ちに遭つた跡ではないですか」といふ報告を受けました。もしこの阿弥陀如来が聖人念持仏伝



写真17 親鸞聖人自作と伝える鈍彫の阿弥陀仏像

説の阿弥陀様であるならば、この伝承は織田信長焼き討ち以前の、かなり古くから伝えられたという事になります。

親鸞聖人絵伝（親鸞聖人実伝）

そこで「蕎麦喰い伝説」が単なる口承なのかどうか調べますと、大乘院独自の『親鸞聖人絵伝』二幅が伝わっていることが分かったのです。『親鸞聖人実伝』と呼ばれています。

絵伝の内容を少し検討しましょう。例えば、九歳の得度のとときです。

明日ありと思ふ心は仇桜、夜半に嵐の吹かぬものかは

これは、親鸞聖人が青蓮院の得度時に詠われた有名な歌だと聞きますが、これもこの中の一カットとして詞書ことばがきと共に描かれています。

西本願寺で扱う御絵伝は四幅絵伝で、ただ絵だけです。本来は絵の説明書ことばの書きがセットでなければなりません。今日では、絵伝としての絵と、御伝鈔としての詞書きが別々に伝わっています。報恩講のときに御伝鈔の拝読があります。単に拝読するだけでなく、その内容に相当する箇所を示しながら拝読するのが本来でしょう。

ところが、この大乘院に伝わる絵伝は、詞書きが同じ紙幅の上部にまとめて書かれています。中・下部には絵だけが、これもまとめて描かれています。です



写真19 親鸞聖人絵伝二幅



写真18 右余間の慈鎮和尚の図

から、下部の第一図はどの詞書かを確認しながら読む必要があります。絵のみでは内容がわかりませんので詞書が大切です。これがなかなか読みにくい書体です。学芸員が読んでくれましたので分かりました。小寺先生の口承とは少し異なりますのでそれを紹介しましょう。

下右の絵は『親鸞聖人実伝』の中のワンカット図です。右横に色衣を着て座っている方が慈鎮和尚です。黒い衣を着けている僧が同僚のお坊さんです。少し薄い墨色で描かれているのが居ないはずの親鸞聖人です。皆がそろって蕎麦を食べる準備をしています。同僚の表情を見てください。驚いているのが見取れると思います。この絵伝では少し分かりにくいでしょうから、これをヒントに現代風に描いたのが下左の写真です。正面が慈鎮和尚で、左の上座に聖人が座っていますが、ここでは聖人は金色で描かれています。阿弥陀如来の化身という事を示しているでしょう。

余談ですが、私は縁ある方々を比叡山に案内します。その中にそば屋の主人が居たのです。するとこの絵を見て、「先生、この絵は間違っています」というのです。思わず「どうして？」と問いました。親鸞聖人当時はザル蕎麦はありません、ということです。ザル蕎麦は江戸時代に来たものだそうですね。それ以前は「そばがき」が主流だったようです。今でいう「団子そば」です。そのような話を聞きましたが、さすがに右の絵伝ではザル蕎麦は描かれていませんね。

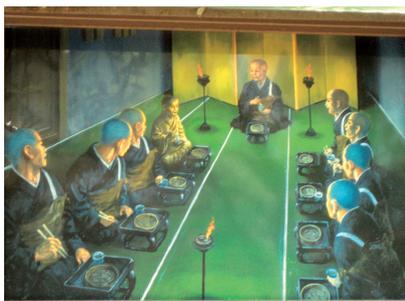


写真20・21 蕎麦喰いの場面二種

次いで小寺先生の口承による念持仏の「鈍彫りの阿弥陀如来」に関する記述です。やはりこの伝絵に記載があります。聖人がその阿弥陀様を彫像している場面が見当たります。その詞書には

聖人磯長の聖徳太子の霊告により、わが命も今後十カ年と感知し、わが修行も衆生済度の大願もともに到底満足すべくもあらずと悲泣驚嘆したまひ、直ちに大乘院に帰り、鈍をもつて一体の弥陀の尊像を彫刻し、再びこの世に生まれて末代凡夫を救はしめたまへと願求したまふ。

とあります。聖人自作の鈍彫りの阿弥陀如来の来歴です。そして

現今の当院安置の鈍作阿弥陀如来は、すなわちこれなり

の文章まであります。ですから、この阿弥陀様が親鸞聖人に姿を変えたという風に理解していたようです。ところが、他のカット絵に、もう一体彫像している場面があります。その詞書によりますと

聖人二十六歳のとき、慈鎮和尚の訓戒を受けて感ずるところありて、身代わりの木像を彫刻したまふ。

というのです。「身代わりの木像」ですから、親鸞聖人が自ら自分の木像を彫ったという意味です。その詞書には、その後、二十九歳、大乘院より京都六角堂へ百夜参詣の砌同宿なごの僧たち、お師匠へ種々ざんげん讒言致しければ、和尚聖人の在宿を試みると、夜中にわかにはそばの供養をなしたもふに、この霊像聖人の身代わりとならせたまふ。

とあります。「この霊像 聖人の身代わりとならせたまふ」ですから、自ら刻んだ親鸞聖人像が蕎麦を食べたことになりす。しかも

これより、そば食い木像と称するに至れり。

と絵伝には語られているのですから、こちらが伝承の事実でしょう。小寺文穎先生の大乗院口承伝説とは少し違い

ます。その違いを小寺先生に確認したところ、「やはり、阿弥陀様が親鸞聖人に姿を変えたんですよ」といい張って止みません。「私たちは、天台宗のお坊さんです。毎日々々、他宗派の御開山にお給仕していると思えば抵抗があります。しかし、阿弥陀様が親鸞聖人に姿を変えたと思っただけならば、抵抗なく親鸞様にお給仕ができます。ですから大乗院の僧侶たちは親鸞聖人のお姿に化身された阿弥陀様だと信じてお給仕させてもらっています」と言われました。ところでこの『聖人実伝』中に、左下の写真のようなワンカットがあります。大乗院の玄関の様子です。赤い衣をつけているお方が師匠の慈鎮和尚です。その前に白衣姿で倒れている人が親鸞聖人です。白い衣を着ているのは、回峰行の行者さんの姿ですから回峰行中ということになります。この白い姿は一般に「神僧の姿」と呼ばれます。昔は神仏習合ですから、お坊さんが神様に祈ったり、あるいは神主さんが仏様に祝詞のりとを上げたりしました。この場合のお坊さんが神様に祈るときの姿が神僧の姿です。全身真っ白の衣です。この姿こそが、今日の回峰行者の姿でもあります。昔とまったく変わっていません。親鸞聖人の背中を抱えているのが同僚の僧でしょう。土間にいる二人は行者の手助けをする在家信者でしょう。

この場面の詞書きを見ますと、

聖人無動寺大乗院に住し、大満の行御修行の砌、帰院の途に遅かりければ、御師匠慈鎮和尚の御懸念一方ならず、侍僧等を遣わしたもふに、身心過勞の結果にてやありけん。途中に卒倒氣絶したまへるを連れ帰り申せしに、かたじけなくも御師匠の出迎えあり。感極まり涙にむせびたまふ。

とあります。



写真22 大乗院の玄関のワンカット

親鸞聖人が大満の行を修しておられたという伝承です。大満の行とは今日でいう千日回峰行をいいます。織田信長によって焼き討ちされた後と先とは回峰行の形式が異なるという学説もありますが、焼き討ち以前に関しては詳細なことがわかりませんので、今日の回峰行の形態で説明しますと、全行程を七年かけて千日歩きます。七百日までは毎日七里半（三十キロメートル）です。比叡山全山が修行道場ですから登り道もあれば下り坂もあります。ここを草鞋わらじばきで歩くのです。一年に百日の場合と二百日の場合がありますが、とにかく五年で七百日を歩き通します。七百日終わった時点で九日間の断食・断水・不眠・不臥という過酷な「堂入り」に入ります。それが終わると次の年からは一日に倍の十五里（六十キロメートル）を百日間歩かねばなりません。その次の年が最終年ですが、前半は京都大回りという一日二十一里（八十四キロメートル）になります。これも百日歩きます。その年の後半はお礼参りという最初の七里半に戻り、七十五日間歩きます。どこまで歩いても完成はないという意味で二十五日を残しますが、一応これで千日を達成したとして北嶺大行満大阿闍梨の称号が許されます。これが今日の形態ですが、親鸞聖人当時は残念ながら詳細はわかりませんが、これと大きく変わってはいないと思われます。

ところで聖人の回峰行に話を戻しましょう。聖人はこの千日の行の間で気絶をするほどの状況に至ったというのが「絵伝」の記述です。そのようなことがあるのだろうかと思ひ、私が教えた学生で千日回峰行を満行した藤波源信阿闍梨に聞いたことがあります。「親鸞聖人が千日の行の最中に気絶したという記載があるが、大げさな表現ではないだろうか。あなたは気絶するような機会はあるのですか」と。すると「私は気絶はしませんでした。それに近い状況に至ったことがあります」と応えたのです。「それはいつ、どこですか」と聞きますと、七百日を歩き終え、堂入りが始んだ明るる年、八百日に入った時の事だそうです。一日に歩く距離が倍の十五里（六十キロメートル）になったと説明しましたが、その時のことだと言います。このコースは通常の七里半に加え、比叡山の

京都側の麓に位置する赤山明神まで参拝しなければなりません。いわゆる急な雲母坂の往復が加算されるのです。ですからこれを一般に赤山苦行と呼んでいます。「苦行」と名づけられるだけに熟練した行者であっても大変な行者道だそうです。私も試しに歩いてみましたが、この年齢になりますと、到底登ることができません。途中で引き返し、下り道だけを歩きました。それでも膝がガクガクして大変で、一般の人が要する倍の時間がかかりました。

それを、「行者さんは登るスピードと下るスピードが同じ」と言います。そのようなことは考えられないですから再度行者に問いますと「行者杖があるから可能なのです」と言います。八百日目に入りますと行者杖が許されます。この杖は背丈よりも長いのです。最初はどのように使用するのだろうと疑問に思っておりまして。すると坂道を下るときはブレイキに使用すると言います。足を進める先に杖を下ろしてブレイキをかけますので、背丈よりも長い杖がいるのだそうです。これは分かりますが、問題は登る時です。今度は權かをこぐようにして、右左を交互に支えながら上るといいます。そうすると「上るスピードと、下るスピード、それに平地を歩くスピードがすべて一緒になるように歩くことが出来る」というのです。どの行者に尋ねても同じ答えが帰ってきます。私たちにはなかなか信じる事ができません。

ところで藤波阿闍梨は「この雲母坂の途中で、私も気を失いかけてました。」と応えたのです。「だから、親鸞聖人の伝説は、決してデタラメなものではないと思います」と付け加えてくれました。

そこで、ついでながら他の阿闍梨さんに尋ねたもう一つの点を述べておきたいと思えます。それは大乗院に住したことのある光永阿闍梨さんです。すでに述べたように親鸞聖人は、大乗院から六角堂まで、夜中にこっそりと往復されたと聞きました。これが現実的に可能かどうかを確かめたかったのです。「もし可能ならば、回峰行を終えたあなたにとつて、六角堂まで何時間で往復できますか？」と聞きました。するととても簡単に「往復三時間です」

と応えたのです。実際に歩いたことがあるから即答出来たのでしょう。それならば十分に夜中でも往復可能で日参できますね。

上に述べたように七百日が終わったその日から九日間の堂入りという過酷な修行があります。断食、断水、不眠、不臥ふがです。「この九日間の堂入りが終わると、体質改善がなされて体が軽くなります」というのです。だからこそ「大乗院から六角堂までの往復に三時間もあれば歩けますよ」と言ったのでしょう。これには驚きました。

回峰行

親鸞聖人が回峰行を満行されたのは比叡山に伝わる伝説ですが、このような伝説が聖人が修行をされた地に今日も伝わっているのですから見過ぎすことは出来ないと思います。そこで、残りの時間を回峰行に関して話したいと思いますが、その前に自力聖道門の修行の厳しさを垣間見る意味で下の写真を見ていただきたいのです。

ただこれは私が撮ったものではありません。西川勇さんの写真集『行：酒井雄哉師の足跡』に掲載されてあるものです。先年、龍谷大学からご本人に使用許可を願ひ出たのですが、この方だけはどうしても連絡がつきませんでした。もしご存じの方がおいてでしたら教えて下さい。

箱崎文応と言う行者さんです。周りが凍った滝に入って打たれています。この写真を撮った時は九十歳でした。「盲目の行者」と言われたり、「御前さん」



写真23 箱崎文応師の滝行

と呼ばれていました。若い時からあまりにも厳しい修行をしたので、目が見えなくなったそうです。箱崎文広さんは、高齢になってもお弟子さんが付きませんでした。師匠が厳しいものですから、来たお弟子さんがすぐ逃げ出したといえます。このようにして、他力浄土門にいる私が、自力聖道門の厳しさを知らされるきっかけになった一枚の写真です。

やはり高齢になりますと身の回りの世話が必要です。食事の準備、風呂、洗濯などなど、どうしても小僧が要ります。そこで、「酒井さんなら大丈夫だろう」と言うことで、後に二千日回峰行者になった酒井雄哉師をお弟子にしたといいます。すると酒井さんは、根性がありました。「師匠が立って滝に打たれるのならば、私は座って」と言っ、座禅をしながら滝に入ったといえます。下がその時の写真です。ちょうどこのころに私が叡山学院の講師として出講しておりました。酒井さんは私よりもずいぶん上の年齢ですが、まだその頃は学院生だったのです。あの方は四十歳を過ぎてから叡山に入って来られたものですから、私を先生と呼んでくれます。そこでこの写真を見ながら「何分間入っているんですか」と尋ねたことがあります。「五分間では入り足りないが、八分も入っておれば、今度は体がカチカチになってしまふ。だから、六分程度にしていますよ。毎朝こうして滝に打たれると、どんなに寒い日であっても、一日中ポカポカしています」と答えましたが、後にあのような大行者になられるとは思いませんでしたので、非常に気楽に、学院の窓に腰掛けながら話したことを懐かしく思い出します。ですからあえてこの写真を紹介しました。まだ酒井さんが回峰行にはいる以前の事です。

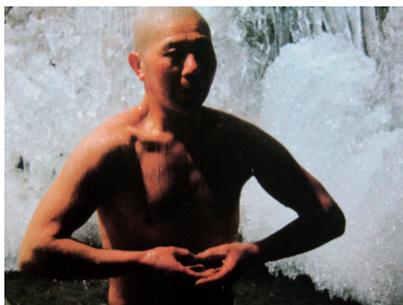


写真24 酒井雄哉師

鳥瞰図

再度23頁の鳥瞰図を見て下さい。先ほどの大乘院のある無動寺谷が左の端、叡山の南に位置します。この無動寺谷が回峰行の根拠地になります。これを無動寺回峰と呼びます。昔は三塔それぞれに回峰行があったようですが今日では無動寺回峰が主です。ですから無動寺谷が回峰行の出発点です。歩く範囲は東塔・西塔・横川の三塔を周り、麓の坂本も含めて、ぐるっと一周します。比叡山を下りて上るわけです。いわば「比叡山全山が道場」といえるでしょう。

回峰行者の衣体

下の写真は無動寺谷にあります建立大師相応和尚の石像です。回峰行の創始者です。この像から行者の衣体を見たいと思います。頭に着けているのが行者笠です。それに小田原ちようちん、腰ひも、ずだ袋、行者杖ですが、それぞれに意味があります。

何度も言いますが、全身真っ白の姿です。石像にはありませんが左のイラストには腰に短刀を着けていますので、これについて特に説明しておきたいと思います。金襴の袋に入っていますので大変に目立ちます。日本にたくさんさんの修行がありますが、短刀を持つて仏道修行をするのは、この回峰行だけだと思います。



写真25 建立大師の石像

ます。私たちが学生の頃には実際に短刀を持って回峰していましたが、近年は持たなくなりました。これも社会通念が浸透してきたからでしょうか。ですから石像にはありません。刀は腹を切る時の切腹用です。病気になったり足を折ったりして、これ以上歩けなくなったときに、「腹を切」らねばなりません。昔はそれだけの覚悟を強いたのでしよう。今日ではそれが出来なくなったから刀を持たなくなったのでしょうか。回峰行も「好相行」と同じく「行不退」と言われます。ひとたびこの行に足を踏み入れたならば止めること（退する）が出来ないのです。退するとは死を意味します。要するにこの行を失敗すれば死なねばならないということです。失敗とは途中で挫折することです。たとえそれが病気であったとしても、怪我であったとしてもです。これ以上歩けなくなったときは死ぬときなのです。それだけの覚悟が無ければこの行は出来ないと言うことでしょうか。私は今日までの行者からこの短刀の意味する内容をよく聞かされたので、今の若い行者さんに「刀を持たないで歩けば意味がないね」と言った事があります。すると、ある行者は「いいえ、刀がなくとも死ぬのうと思えば、どんなことしでも死ねます」と言ったのには驚きでした。若い星野圓道という阿闍梨さんがおられますが「足の骨を折ってでも、七里半を歩きましたよ。」と言いました。「やはり、死なねばならないと思えば、どんなことでも出来ますね」と答えたのには、その覚悟の程を知らされた感じがしました。

私が直接行者から聞いた短刀にまつわる生々しい話があります。これを聞いて、自力行者の覚悟の程がわかった感じがしました。その行者とは先ほどから話しています酒井雄哉阿闍梨です。その酒井雄哉さんが千日回峰行の最中に、行に入る数日前、足の指に棘が刺さったのが原因で「ひょう疽せき」になったのです。それに気づかずに行に入り



写真27 行者の腰につけている金綱が短刀（酒井師）

ました。行中には病僧を認めません。病気は気から来るものだという訳でしょう。ですから例え外傷であっても医者にはかかれないのです。「ひょう疽」ですから、傷ついた足が腫れあがって来て、終に歩けなくなつたと言います。行者が歩くことが出来なければ切腹しかありません。

酒井さんから実際に聞いた話です。死を覚悟して大きな岩へよじ登って、腹を切る覚悟をしたというのです。ところが、腹を切つたつて簡単に死ねるわけではありません。最後の息の根を止めねばなりませんから、喉を絞める腰紐まで常に行者は持参するよう用意しています。しかし腹を切つても、腰紐を喉に締める余裕が無くなれば大変です。ですから、岩の上で腹を切つて、もし息の根を止めることが出来なければ、喉に短刀を突き刺して、飛び降りれば完全に死ぬ事が出来るだろうと覚悟したそうです。

そして、いよいよ紐をほどいて短刀を出したときに、気付いたのが「ひょう疽が憎い」と言うことだったと言います。この「ひょう疽」にならないければ行が完遂できたのにと考えますと、山の中ですがそこで手術すればどうだろうと思つたと言うのです。そして腫れあがつた足の親指を縦に刀で切つたそうです。そうすると、中の血膿が飛び散つて、あの気の強い酒井さんが、「氣を失つた」と言います。

「三十分ほど氣を失つていただろうか。まだ周りに雪が残っていたのでその雪の冷たさで目が開いた」そうです。そして、周りを見れば、血膿が散らばつて真つ赤に染まっていたそうですが、足を見ると、右と左の足が同じ大きさになつていたというのです。腫れ上がっていた血膿が全部外へ出たのでしょうか。「これならば歩ける」と思つて、歩いたといえます。すごいですね。ところが、傷口を縦に切っていますので、歩く度に傷口がパッカパッカ開きます。それで、道の横を流れている小川の清水できれいに洗つて、親指を草でくくつて歩いたそうです。なんとものはや……凄まじさを飛び越えて呆れかえるというか、思わず笑つてしまいました。すると阿闍梨さんは「浅田先生、

笑っておられますが私は真剣だったのですよ」と言われたのには恐れ入りました。

ところが、問題はその後だったようです。もし、そこからバイ菌が入れば、終わりです。「それで、どうされたんですか」と問いますと「いろいろ考えたんだけど、ポマードを塗ってバイ菌を防いだんだよ」といわれたものから「それは良かったですね。しかし、頭の毛のないお坊さんのお寺にポマードがあつたんですか」と言つたんです。すると「浅田先生はすぐ茶化す」と言つて怒られました。が、きれいに治つた傷痕を見せてもらいました。「是非、写真を撮らせてください」と頼んだんですが、これは断られました。

最後に阿闍梨さんが素晴らしいことを教えてくれました。「私たちは、『回峰行をする』と言いません『お行をさせていただく』と呼んでいます。行は仏様から与えられた修行です。行が終わればお医者さんにかかれます。ですから、信者さんにおられるお医者さんの顔を浮かべながら、あの人に診てもらおうか、この人に診てもらおうかと思つていたけど、行が終わる丁度一週間前にきれいに治つたんですよ。やはり、私たちは仏様の手のひらの中で「お行」をさせてもらつているんだということを教えてもらいました」と怪我から私の有り難さを感じたと言われました。それにしても自力行とは命懸けの修行ということが分かりますね。

もう一つ話しておきたいのが「足」にまつわる事です。百日回峰行者の姿を見れば裸足に「草鞋わらじばき」というのが分かります。本日お越しの皆さんは、お年を召しておられる方が多いですから、「草履ぞうり」と「わらじ」の違いは分かると思います。今の学生にはこの話は通じません。下の写真のイラストを描いた人も区別がついていなかったのでしょうか。これは草履です。わらじではありません。

せん。

台座の上に足の指まで載るのが「草履」です。これならば山の中を歩くことが出来ません。「わらじ」は、鼻緒が台座の先端に付いています。先端に付いているということは、足の指は全て台座の外に出ます。その外に出た指で土をかくのです。だから坂道なども力強く歩けます。いわば、はだしで歩くに等しいのです。

私の教えた学生が回峰行に入った一週間目に、行中見舞いに行ったことがあります。その卒業生は二十歳過ぎの頑丈な男子学生です。その学生が涙ながら話してくれました。「先生、つらいです」って言うんです。「何がつらいんだ」

と聞きますと、「足の裏が痛くてつらい」と応えました。今の学生は靴の他は履きません。まして「わらじ」を履く事など、まずありえません。少し練習はしたでしょうが、僅かだったのでしょ。その「わらじ」で、毎日七里半を歩くからでしょう。それは大変だと思えます。「足の裏にマメができるんです。このマメをうまく処理しなければ、明るる日は歩くことが出来ません。例えうまく処理できたとしても明るる日になればそのマメの上にもまたマメができるんです。これを下手につぶしてしまえば歩けなくなります」と言います。

また意外なことも聞きました「アスファルトの上を歩くのがつらいんです」と言うのです。私には最初意味が分かりませんでした。靴を履いていると感覚がつかめません。なるほど硬いアスファルトの上をはだしで歩けば痛いのですよね。それを言っているのです。また、行者が歩くコース上の道を「行者道」と呼んでいます。ですから本来は人一人歩くだけの細い道です。ところが、近頃は行者だけが歩くのではなくて多くの人が出入りします。例えば



写真29 履き終わったわらじ

山の木を伐採する職人も山へ入りその道を使用します。その折りには、軽トラックが入れるようにと行者道を広げるのです。しかも広げた道にはバラスを敷くのです。バラスとは、トゲトゲの小さな石で行者はあの上を歩かなければいけないのです。「ですから、大変なんです」と言っておりました。

そして「雨が降れば、また大変です」とも言いました。行者さんが履く草鞋は、「八目のわらじ」と言つて、普通のわらじではありません。鼻緒の目が八つあります。ですから、足がなじがらめにくくられるようなものです。そこへ雨が降つてわらじの藁がぬれますと、締まつてくるのです。そうすれば「使い古されて切れなくなったノコギリで、足の上をゴリゴリと切られるような痛さです」とも話してくれました。

もう一つ、行者笠に関して話しておきましょう。これを「お笠」と呼んでいます。最初三百日までは、頭に着けることはできません。手で持つて回ります。ただ雨が降れば被ることが許されています。じっくり見せてもらいますと、大きさの割合に比べて、かなり軽く感じます。禅宗の雲水が被る丸い「あじろ笠」がありますが、その両端を上側に折り曲げた形状です。ちょうど裏側の頭に当たる箇所に、六文銭が貼つてありました。聞いてはいましたが実際に見ますと驚きです。卒業生の行者に聞きました、「この六文銭はどういう意味?」。すると「先生、知りませんか。三途の川を渡る為ですよ。」「六文銭だから想像はつくけど、今どき六文銭はないだろう?」と思わず聞き返しました。このように問いつ返すのには理由があります。禅宗の雲水さんは涅槃金ねはんきんと称してあじろ笠の裏面に十万円を貼り付けてであると聞きます。要するに、全国どこを行脚して亡くなつても、この十万円で、火葬にしてほしいという意味らしいので



写真30 藤波師による行者笠の解説

す。「これならば現実的だが、六文銭では処理もできんじゃないかな！」といいますが、彼は「いいえ、私たちは、師匠の指示どおり、言われるままの修行をしているのです。ですから、それが現実に合うとか合わないとかは関係ないのです。師匠の言うとおりに行っています。その師匠は、またその上の師匠の言うとおりに修してきました。一般の人は十年一昔などと言いますが、修行には百年一昔、いいえ千年一昔というように、比叡山では昔ながらの修行を行っています。修行には現代化は無いのです」と。

この言葉に私は大変感動しました。学生時代にこのような素晴らしいことを言う学生では無かったのに、修行は人を育てるのだなアと感心しきりでした。

そこで気づいたのです。私は現在の比叡山に残っている修行を親鸞聖人当時に当てはめるのには時代的な差を考えば無理があるのではないかと躊躇していました。しかし彼の言葉を聞いて自信ができたのです。親鸞聖人当時、あるいは伝教大師当時のままの修行を、今日も比叡山で修されているという思いに至ったのです。ですから現在の修行を親鸞聖人当時の修行と考えたとしても大きな誤りにはならないだろうと思います。

千日回峰行にはこれ以外、お堂に九日間籠つての「断食、断水、不眠、不臥」の「堂入り」がありますし、一日に二十一里を歩く「市中大回り」もあります。本日は時間的に限られていますので総てを話すことが出来ませんでした。

ただ、親鸞聖人の比叡山時代の修行内容には堂僧や好相行なども様々に考えることが出来ますが、比叡山に回峰行を修された伝承が今日まで残っていることを皆さんに知って頂きたかったことと、聖人が二十年間も修行された自力行のすざましさの一端を知ることによって、他力浄土門のありがたさをご理解頂きたい思いで話しました。ありがとうございました。

〈写真出典〉

- 写真6 道元徹心編『天台 比叡に響く仏の声』（龍谷大学仏教叢書三、自照社出版、二〇二二年）
写真23・24・27 西川勇『比叡山千日回峰行 酒井雄哉師の足跡』（講談社、一九八一年）
その他 筆者による

〈キーワード〉

- 五木寛之 好相行 常行三昧 親鸞聖人実伝 そば喰いの木像 回峰行